

# 第VIII因子活性の二つの測定法

## 凝固一段法(OSA)

FVIII欠乏血漿に、標準血漿あるいは被験血漿を添加し、APTTが補正される程度を比較して活性値とする

全体の所要時間で評価

## FXIIなどの接触因子

FIX → FIXa  
FVIII → FVIIIa  
トロンビンによる切断作用

FX → FXa

フィブリン

## 合成基質法(CSA)

患者由来のFVIIIaにより十分なFXaを生成したのち、FXaに特異的な発色性合成基質を添加し、生成したFXaの量を光学的に検出する

FXaの生成量で評価

## 凝固一段法(One Stage Assay: OSA)と合成基質法(Chromogenic Substrate Assay: CSA)の違い

OSAでは患者血漿由来のFVIIIによるフィブリン生成するまでに要する凝固時間を評価。CSAでは患者検体中のFVIIIaにより生成されたFXa生成量を評価する。